拾遺都圖繪

五冊之内 四

農務省圖書 滿印
第共號冊 七 貳 五

火 政 官 文 庫
和書門
一一三七八 號
五 冊 架 函

内閣文庫
和書
一一三七八 類
五 冊
一七二 函
一四 架

内閣文庫
番號 和 11378
冊數 5 (4)
函號 172 180

風土

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

五七七二番

拾遺都名所圖會卷之三目録

浪華玄民

加茂祥寺とろきうーの梅
木刈坂
妙見社
圓通寺 潮音堂
神明宮
静原
足洒石
大悲山 補遺
役行者坐禅石
花園
亀山
疾燒 鞍馬の奥ろ
都運送の圖
立田祠
茶王坂
螢石
乳巖
車坂
惟喬般若
桟敷嶽
小野橋
西来寺 五百羅漢像
大豆塚
幡枝八幡宮
福惜昆沙門
小野皇后旧趾
歸一法眼塚
宮中柱蔵
滿樹峠
雄多祠
小野皇社
櫻井
辨天社
升塚
栗徳辨天
巷辻
梶取社
龍王瀧
溪川筏流
玄畑
岩屋山 奥院 飛龍瀧 護摩祠 香水
蔵宮

明治十三年購求

伊澤

御栗栖野
二子塚
小野道風社（景の詩和香水碑）
天皇陵
石不動
六請明神
大内山
宅麿塚
北野御旅所
恊地蔵
氷室社
婦夫石
大宮
惟喬社
光天石
十禅師社
光孝天皇陵
清瀧河
白樂天社
極樂橋
惟喬王社（同塔）
須天祠
小野篁墳
若宮八幡
浄藏貴所塔
濟信法親王塔
車塚
御室花見
橋沢宅
安居
山森
若緑松（御所内）
宗式部墳
頼光墳
不動石
宇多野
福王神
地藏院
花園
龍翔寺旧趾

右白虎目録

常盤源光庵
水尾陵（水尾山寺）
定家卿塚
辨財天祠
堀抜川
鼎淑孺人墓
臨川寺
大堰川（漁釣林）
西行櫻
最福寺
長福寺
西院
細谷直指庵
福田寺
生六道
化野念佛寺
療病院
落柿舍
嵯峨野
後嵯峨院陵
大悲閣（子以碑銘）
峯堂
谷堂
梅津左衛門塔
春日社
北嵯峨大覺寺
後亀山院陵
中院観音
五所明神
三帝御塔
下嵯峨車折社
兼明親王亭
亀山院塔
野依
眞如寺
山之内
任告社
水尾清和天皇社
仏教寺
西行庵
菖蒲谷
圓光大師廟塔
鹿王院
亀尾瀧
法輪寺（細圖）
別雷峯
神代三陵
德成寺
高山寺

秀傳庵
大文臺
福源院
藤原兼房公莊
御靈社
觀音堂
長法寺
冊屋谷 行道石院墓 佛谷
業平遺蹟
長岡大滿宮 補遺
宿院成就院 鶯の社 鶯塚
神陵山

宗圓寺
御所内
津寺
老坂地藏
保古羅明神
大原野
楊谷觀音
淳和帝陵
廣谷
三尊寺
成恩寺

寶藏院
勝定院
三宮
久世橋
子敦盛祢
善惠上人塔
淨土谷
長岡舊都
向町 典陵寺 真經寺
神足社
神宮寺

野宮 同清水
幸林房墳
桂里
伊勢宅
蓮生寺
物集女永正寺
葉願寺 大同石像 安養谷
皇居旧趾
角田 法蓮塚 櫻林
勝龍寺
袖搦松

幡枝
圓通寺
潮音堂
白花石
佛石
經陀石
滝横石
ちやうし

ちやうし
そねが村
ちやうし風石
門石
ちやうし石
湖水石
伊澤

小野橋山端乃小かわ乃ほとりに橋あり小の方に花園長谷等に
いくさの時の橋なり坂西に到るとて木幡坂乃小野の
枕津とよめるは此所なるへし
万葉集 時うして春をかねとて花れ小野の杜はに日そ見へける　後九条
梅井　松崎乃西小岩藏かいくさ坂のまへ右乃方乃ほとりに山の神とうづく
社あり其西におしき井あり
拾遺 梅井乃うちに
本花坂乃ほとり春を深せ名はなり　本紫色つく梅井の里　為家
本列坂　梅井乃西小の坂なり溶陽より鮮かに見ゆる人うせの人狐坂とつけあり
古老乃いひくむるは山桂木繁きを住宋の人歩しらし
古證文に本列坂坂限るとあり　太平記に石藏大寺乃境界記録
花園　小野橋より小十二三町かあり
今の妙心寺れ地とす
後世此地かうりて花園と本尊観世音は智證大師の作長九尺計初は英彫瓜にして今は府
万年山西来寺　霊蔵寺に属に近年五百羅漢と興立に現住了真和尚勧進して大方成就せり
辨財天社　所小乃山トかあり　妙見社　地主神
亀山　本列坂を越て石藏に到は東西かニッの岡あり
大豆塚　菩薩地乃丑寅乃かたにあり毎年取の大豆を方々
お雛を所鬼神にそなへ此所に納むるいひ傳へあり社乃本源

あり往古に塚乃うへに桃　塚　大豆塚の西二町ばかり
大悲山圓通寺　懸枝村　禅宗にして佛殿乃本尊を聖觀音
坐像三尺計　大悲圓通の額を後水尾院れ震翰
定朝の作　潮音堂乃本尊に准胝観音　坐像の又西國廿二所れ観音を安置
此地えに免に園光院文英尼公の宅地之則尼公に園光大た基任公
乃女なり寺となるに時に妙心寺龍泉の祖實性禅師を開山
また　後水尾院沸玉位の沸時沸祈須所なり沸震翰
沸衣等を賜る寺鎮となり同帝行幸の沸茶亭あり
三猿堂霊泉庵に門前の南なる五ありて園光院塔を本堂
乃ふるしかあり　延寶八年十月十一日　都て此地の庭造小堀遠州別
れ好みて東の方なる比叡山を庭中へ抹寄来真好みして盤
陀石とて名石あり又白華なる佛殿の小かあり
あるて去に入かほりて寂寥なる花の陰に都下の騒人群り来る

宿鞍馬山示同遊諸子

澗戸鞍山夕偶投
丘壑看枕流鳴石
急飲席近雲寒更
門風塵遠無嫌道
路難明朝謀出處
不必向長安

南郭

く禊晋ゞ醉中ふ逝禅坂愛を相ともいてべき

幡枝八幡宮　旧所の世刃小山乃上ふあり所石清水とはー番村の號いさ紀ふ語ふるうり年歴詳ふ

栗穂辨財天社　野中村の福乃神賊天女安亜俗に云ふ天女面地神向の来りく

こうめいむ村老乃爰り爰り夢ゆ紀天女ふ告て花上て来りく

いよりれそふ上ふそふ紀天ふ

ちろを東方ふ鞍る寺乃隣り

りく居坂多門天の近隣乃地ふ

ゆをすかりち福徳園満乃地ふ

栄えと部絶くさ免て場ふ

いづるみ六寸の白秘栗乃穂を坐せる一村衆議してまり假

殿ふ真像社壇を造りく鎮坐しけるされ坂客人栗

樹木和とりけるを時ふ永享二年九月九日の夜の霊夢ゆ

応験はをく新り

神明宮　旧所祇天社乃むしみあり祭神天照太神社殿の葺草

いと神さびてあり乃樹林翁鬱ゆ鈴の音を珍瓏と

霊園　なり

立田社　旧所道乃さりふあり神倭詳ゆ次

土人巷沙神ふた免て福冨や

福惜毘沙門堂　旧所立田の小ふあり近年

毘沙門堂を地乃藏にて

鞍馬寺乃多門天て糸猪

ゆ門天を福坂山所乃東乃

ゆ福坂山所の人い山所の

ゆ敬る糸猪の人い山所の

苍辻　毘沙門天堂後あり古れより小ふ

原にいるちはさうり

静原　ちはさ乃辻より十町餘ふあり山所山間ゆて

南ふ山ゆて人家多し

山家集　ふる乃住方ゆ山乃武巷ふあせり静原の雪　西行

薬王坂　坂云玉佐坊昌俊京より山所ふ逃来りしうり

源平盛衰記云

昌俊ハ大原法ふゆて龍華越坂を法ざ小ふ坂さて法

俊大原より薬王坂を去ん鞍馬山ふ入け龍る己上巻四十六十

二丁龍華越ハ大原の小

迎ふ法ふあり

小野皇太后宮乃舊跡　舊跡洋ふ次坂

寸治関白頼通公の

第三の女之所詳ゆ観子

續世継物語云

二君ハ後冷泉院乃女御ふ系て后立ゆして皇后宮と申た坂ふ

位おそひえの山ふ入ぬり空小野と申ふ里ゆ龍ゆさせ奉まして都の

外ふおこうし

そゆ乃人を下裏

白河院御雪乃あしと書見の行幸ある度しゆきく御供れ
人おこめくらは来ケのきこえし程ふやゐて出御ありて面白た
雪乃那ケのうこへらむり人へ元小野の宮左宮殿のすこえむりやとは
られる紙御随身ありて従者と馬にのせて彼宮へとせまりて
くめ御車はるまでは御車をりて御用意いべしとやたて
きしだるれきぬ具あるる紙せるふふりきるて寝殿十間
ふうんとこれるきこりて御らんとる車もなりいで
とや人をるれしば宮左宮殿書見る人の問えいる車ケとさらだ
たるみきたるくてなんたるは御ケ屋げて御幸ありて
御車やるて入てるてのまふはしてはおるて御ケれて
これ紙ぬんをめきしれる打葉れるみきてる巻二人一人を
院乃れ打ケ小玉のちろ元銀のさに金れ立花一ふさをれ
くる紙ねくりきる一人を序口乃銚子ふ酒紙いれく

ねくる二人乃巻寝殿のまへとくれ紙を多ふをり
てゐるて御車へ参りるこぬいみしを優ふあんこえ行る酒を
うふりてなくをのふる橋を季通御供ふ形ん伯々ふ給
りをりる上皇くらを御りまきるまに於りくりり
き世みくれりはきれて元一所はいて多らしり
くれて只今御幸るりしほげまんくせるる御伝

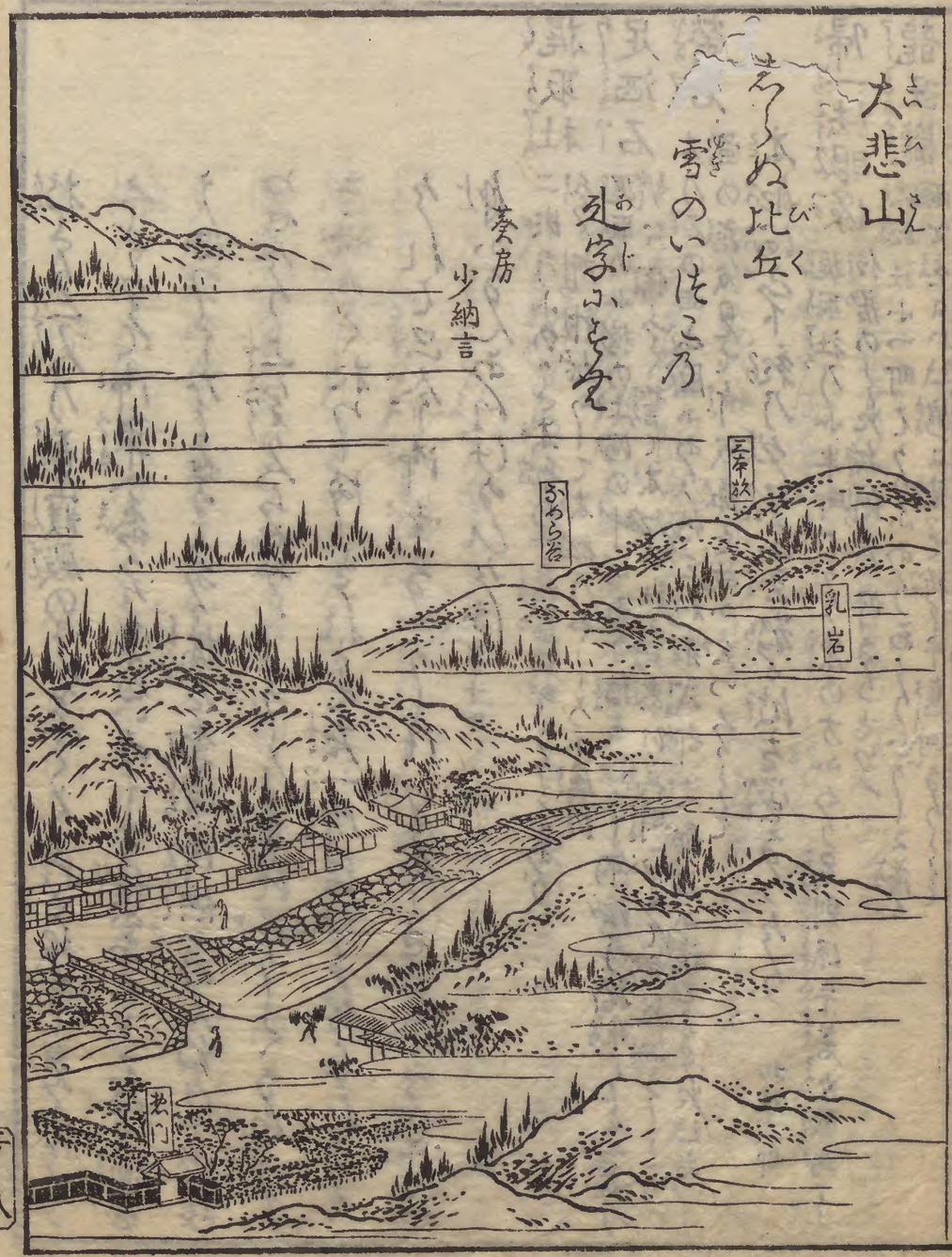
身ふうんありけみひりふ巻十四

梶取社 二所乃小のくこ本船の一鳥居のかこふあり
所祝祭りて本社乃やしろふ属に
足洒石 梶取の小橋の上河の中ふあり伝
嬢取懐く誓て本社の社ふ日参に其時こくて足洒こしとい
螢石 右乃石の西ふ脇ふあり伝元和年式部本船社ふ清こるこれ所
螢の飛紙見て御紙を故ふ名つくるこそ
本船御ふ下乃乃多ふ玉散る波を螢るりり 和泉式部
帰一法眼塚 梶取社乃小半町ばかり東の方ふあり足則源牛若丸鞍馬
龍王瀧 本社社小一町ばかりふあり西ふ流ふ来て祈雨を
雨を乞ふ比瀧ふ来て祈雨乃例りりこそ

大悲山

さくぬ比丘
雪のいたころ
辻字ふとを

麥房
少納言



大悲山峯定寺　當山は播陽乃北の方にて行程十里鞍馬寺より北二邑ある大布施と云ふ所に五里より其中間に別所大布施の爰子の方にて坂路なり其中間に聖護院に属し樓門を大悲と称し下言葉と云ふ宗旨を天台にして

南面にして金剛力士坂安に長六尺余まより本堂に登り来十町あまり巖石嶮々として歩行しがたく左右みな老杉森々として暗く其中間に猪堂あり傳乃石上みい優寛僧都れ石塔婆あり又其上の方に役行者堂あり又其上に六所明神社所謂六所明神は熊野三所権現金峯山金剛藏王八幡大菩薩加茂下上貴布祢大明神地主鏡智童子なり本堂は當山乃護法神にて建立のためい保元元年丙子三月朔日なり南面にして巖上に建堂に至て正面に向て岩屋造りて本尊は十一面千手観音唐乃不空三藏の佛舎利観世音脇に白山権現當山中に安置に紀之松佛

開基は観空上人建立は平相國清盛樓門乃高欄は遊覧乃拝殿當山の縁起は奉行職を記に少人其大意坂採和解なるを長章まで一代の教えぬ法坂説なり者閑窟に古て園菜をのべ三世覚母乃衆

生坂抑しまの之清涼山に立て化道を弘めし大聖世尊猶霊地を尋ぬ凡夫行人争う勝境を捨ん佛子の求願とる所のものは先上正等れ乃遊歴もる所のものは名山大岳れ境之偏に跋渉を事とする所いまで寧て寧居せんに風凰城乃地れから鞍馬寺の乾の方に一霊地を山脚より山頂に至て往々に奇峯あり連々として相接松栢鬱茂して昇峰崎嶇なる佛子は地み至て懇々として去事あるに忽萌蔆をむさんて栖息とる事尚し其山の躰光尋往詣乃便おのく止宿止所定て宛驛亭九量程にてみ歪が必しは外九品乃峰に蓋安養界に擬に第一乃宿峰霊と号に次に第二坂立盤手向と号に第三坂絶小屋居とる山乃西に崇峯あり年尼山と号に次に小の嵩嶺あり善覚山と号に中品上生に象はうり第四坂阿弥陀山と号に次に奇峯あり明覚山と号に中品中生に象はうり第五坂眼覚法土と号に上品下生に象はうり第六坂無原と号に次に奇峯あり尼垢山と号に次に崇岳あり離苦法土と号に上品下生に象はうり第七坂水飲と号に上品中生に象はうり第八坂平地と号に其次の峯坂真覚法土と号に次に奇峯あり真色法土と号に上品上生に象はうり第九坂樂門法土と号に下品上生に象はうり第十坂象ふたりの滋本と号に次に峯に一巻石あり其狀獅子のごとし次に峯なり大日文殊嵩と号に山峯に至て下品上生に象はうり次に峯なり大佛頂金輪佛頂山と号に山峯に至ては大佛頂おなじ諸乃陀羅尼を誦に

帆柱や
風し
雇ひ
雪
物し
彝福

長柱を奥山より
出だせば雪中小峯
より谷へ落ちをる
山車謝恵連が
「雪の賦」ふを
書洩し作る

あり沢乃峰ハ大悲山と号に大悲山ハ救峯乃中臺なり石窟あり亦名ハ一霊石なり
其狀鸞鏡のやし千手観音寶鏡乃千手あり大悲山の號蓋ハ此
なを高く落ハして人事尤希なり白天を去乃形勢なり
八ハ蟻壤ハ嘲て遥海ハ望て眼路を遮なし百谷半峰ハ編
てハ乃石窟の中央ハ面て仏堂閣の基跡を亟久寿元甲戌年二月
三間の堂一宇ハ建立し白檀二尺乃千手十一面観世音菩薩の像一
軀ハ安置し奉る佛座の下ハ石寶なる水の滴る事宛擔留のやしなれを
ハて閣伽ハ供し澄滌ハ充ハ尺二寸乃不動明王五寸の二童子像各
一躯ハ同じく毗沙門天の像一躯ハ年四月ハ至って　仙院鳥羽院　勅命
降て此像を請しなるの大恩不意ハ出く事なれ鄭重なり歓喜踊
躍隨喜悅豫をむる唐の不空三蔵ハ佛閣ハ営造ハ足粛宗皇
帝乃仁恩之今貪道比丘乃精廬ハ建る之寧禅定法を以敷恵ハ
をや三寶ハ帰して萬邦ハ治を六度を以て四海を撫ハ古今ハ稟ハく

和漢ハ類ハし若初生ハ我ハ仏ハ仏とんハ必先縁の比丘弘願を逐事を以ん
若善根ハ此ハ殖とんハ仏のそかるとハ孤露乃少僧素意を果す事を以ん
幸ハ我く抑善根の負意ハ我ハ以ハく尼ハ誦して来世ハ一切衆生乃死乃重病を療じ其二ハ曰早く西方極楽
ハ生まれ初生ハ一切乃經論を誦て還て仏巌崛ハ住し又通力を以て法義經ハ
ハび一切乃經論を誦と其聲法界ハ達しなれを聞くものハ利益
ハ我ハ二途の願大概ハかくれ如し身子むり弓馬の家ハ生まれ因果乃
理ハ辨ハ事ハし畋猟を事とハて業とし漁釣を事とハ春龜サ一忽て
親父を喪ハかの時ハ面て親父身子ハ命じて曰平生の悪業来世ハ苦果
ハ顧と何為ハ方便をめぐらし解脱を祈るべし身子ハ再び新事ハ
聞て刀釵胸ハあるるやし行年廿五善縁忽ハ催し首ハ刎て衣を染
ハれより難行苦行念々歩々我父の何の所ハ生れん事を知らんと
ハび造次顛沛も我父のうづまれ苦を受るる我ハんと期を丹誠一心を

大悲山乳岩

三本杉
乳くと
ふとちろ
さゝれ石
捜ると
をの乳母乃
名を
お君このこ
班竹

盡し系念二年に及て爰中に父の貌を見る牛は馬面に人其後二年を歴て
然那山那智如意猫堂に参詣をそなへ爰想を我父面に人身に獅子其後十
一年を経て播磨國八塔寺に修行を蓋十一面観音乃霊地を爰中に
観世音告そ曰汝が父とそ浄土に往生を前後に爰仰で信をとる又茅子
平生のり業紙墨み存をるその如法の儀式にをりて妙法蓮華経八部を
書寫し一千五百日を限り久しく常行三昧を修し又常行常坐乃両
三昧を修をる千六百日を経歴し又千日を劇て八曼陀羅香を焼其間
常坐三昧を修し心神全く動ぜと此外大峯に修行をて三箇年を送る
自餘の少行奉く記をに遑あ又我父爰中に来て告て云汝常に
山林にあるべし敢て聚落に交る来ることなし於戯山林の睡眠に如来をれと
讃嘆をし聚落の苦行に菩薩をれと詛訶をし誠哉斯言千時
久壽二丙子年仲春二日佛子西念聊由緒を記して来業に貽を也

少納言入道　法名信西

○乳石　當山門おより南十六町ばかりに有り山所に石の狀表平みて雲れ方に
幽谷みてん跡稀なり
乳房十四箇所おのく乳頭の貌を婦人れ乳のゆし其乳頭より乳水奏
滴て落る乳を乳婦に山乳水を飲せば忽乳汁出るとも一年若狭國
乃者此所へ来り岩の乳房を磋て家に持るるに忽悩れしを
大に崇祟ををこしに山所へ返し置る其乳房石は岩上にあり
當山に於ては乳岩明神と崇免護法神と又華表に乳石と一町ばかり
出て下に有り都て山源谷嶮峻にして樵夫も歩しるに不知案内にくを
見る本協ひ〻し乳石谷二町ばかり入と二本枝にして大木
にて又類ひ稀に
本艸綱目に石鍾乳とあるも別種類とは云へ石鍾乳の説
區区にとは云へも其一二を摘んて出る拳に石種乳に大山の源谷
に生ると石乃津氣鍾聚て乳とする又滴留て石とする故に石
鍾乳と號く時珍曰桜ともいふ范成大が桂海志に説ところ甚

詳明之云桂林ハ宣融山ハ洞穴の中石鍾乳甚多し仰て
石脉漏起る處抜視れば即乳狀あり白うして玉雪乃如し
石液融結して乳牀下垂して数峯ハ山を倒るが如し峰端
斷く鋭て且長く氷柱乃如し杜端輕薄中空して鵞翎の
如く乳水滴瀝して已に且滴て且凝るもの乳の最精なるもの
竹管抜以て仰て吹れを和取る下畧慎微曰柳宗元崔連別ハ與る
書ハ云石鍾乳ハ草木乃精なり土ハ依る山の陰陽ハ居て あるひと
木ハ近く石ハ附てあり其性接つて直ハ石ハ産に石精粗疎審
柔尺時異ありて穴の上下土の厚薄石れ高下其產るもの
固ハ一性なり次然も其精密ハよりて出るもの則油然として
清く旧然として輝あり其竅滑ありて夷之其肌廉して微なり
これを食ん人をして栄花温柔なるしむ其気宣流して胃
抜生し腸を通し壽老廉寧あり時珍曰石鍾乳ハ陽明經の

氣分乃藥之本經曰歓逆上氣抜治し目を明ハ精を益し
五藏を安し百節を通し九竅を利し乳汁を下に別録曰氣を益し
虚抜を補ひ脚弱疼冷下焦乃傷竭抜療し陰を強くを久しく
服をれば年抜延へ壽を益し新産抜好して老せる婦人抜して
子あるしむ鍊せんして服をれば人をして髓あるしむ又曰
乳汁通せざるハ鍾乳粉抜濃煎し用ゆあるひハ通草と等分して
末にし米飲ハ練丸し方寸乃ヒハて服をる毎日々ハ三次必驗あり
抑當山を数峯回抱して五嶽の嵩山廬山乃金芙蓉とひべ
用ん観空上人の塚ハ此後ハあり今も讀經の聲風ハ嶺し耳底乃
客とるるぬ古れを訪て山中ハ入まを抜向乃あるし溪の水音と響ど
で沿ふ都て地勢ハ峻々として抜攀登ハ石角ハ衣を鈎裂枝て
首抜止む常ハ啼鳥稀みて庫乃音ハ林巒乃間しき抜解して山
堂乃眠て抜覚を猿ハ多く来て風ハ吟して峯ハ木ばるひあるひハ

新十吟
後次郎水流所時
うのとのことも
大井河のなりて
ふかき淵なれども
ふとしまれる

いろくしよ
まてくくゝ
ゆ上へ
いそうり
やしの
あくしそ

花系資宗

行河のふゞれへ絶とて
たゝもをしのろ五ちだ
其れのちくゝ成りくく
大悲ゑの奥ふる渓川より
大木伐伐くくく未を
大井河小落とあり
さまくくも海往ふて
水神陽侯のちくゝや
いくべき

月ふ嘯そて断腸のこひとのづる玄を見れあふを書原くしく
数人ふおよび続石として玄を當ふの巓ふあり至って峭壁みて登ほ
半ばして門おみ桂の大木なりて株の半より数十本ふつれ
おのく直ふ生立ぬ當ふ乃小滑谷として所をむり後寛保
の室家一族ちみ思ひ住しとして今も當ふ本堂の下ふかの乃
一類乃塚あり九町坂ハ谷を隔て南の方ふいへの往還みて勅使
も山道より来輿しまてあん山坂の登り原天滿宮鎮坐ほまた
ちれ祇知所路天神とうべく今ハ路堤を蚓原みて通ふ者稀なり
久多瀧を遠山奥ふみて飛泉数丈ふ山所周ふ上人れ一の行場みて
今もなりちハ此滝より幼現しのようふ人のもたふ城丹波の國堺を
嵩寺より半里ちり小ふあり都て山地の名産ハ別所大布施より
出て常ふ山中を棲とし農業少くして樵多くして所々ふ炭竈板位つくく
煙絶ぞ如ハ炭薪祇首ふ戴き牛馬ふたけて鞍馬の市ふ運ぶあるそ

京の板柱板皮屋石 座ふ鞍馬 等形ろ
花瀬峠 鞍馬乃小ふあり山間ふ唐櫃岩として大巌あり高サ廿五丈餘ふ
寄付樹 拐鋒乃小ふあり山間ふ唐櫃岩として大巌あり高サ廿五丈餘ふ
ふ立ぬ 拐鋒石として大なり大サハ丈ちり拐鋒の形ふ似ちりふ拐鋒の
ひ茅 壁流 木みて見者ちりふ拐鋒乃株一本みて数十ヶ
年ふの名勝ちり 所ふあり乃系是ふみて千巌秀を競
車坂 上加茂より乾の方十四五町ふあり山坂と車坂としてハむり惟喬親王
小野ふ閑居しまふ山所ふ乗車しまひ山より嶮路ちるゆへ
車坂山所ふ名ありとして
故ふ山名ありとして
滿樹峠 車坂の小半里登る半宇里
雲畑 峠の小一里餘ふあり足より小の方村里乃惣名ふ畑 中塚河 中畑 出谷
奥畑等ふ村里乃惣名ふ畑 中塚河 中畑 出谷
牛若丸宅地 中塚河の東南より鞍馬へ越る山中の中間ふあり由緒ふ詳
住しまふ今古松一株あり
惟喬般若 中畑村總堂ふあり九龍山高雲寺として寺あり惟喬親王乃
設ふ一旦沈ちり大般若経是同経説相畫圖維摩一軸あり
雌鳥社 出谷村の小ふあり系神未考ふ
雌鳥山所ふて鷲しふ故ふ山てみ祠を建しとして
岩屋一鳥居 出谷村乃小ふあり性還乃中ふ立て乃人其中祇通ふ
額紫銅とりて岩屋ふと鎖て小野道開れ乃人足より
岩屋ふまて十六町あり坂道乃左右ハ樹多し
樹祇沸寄附あり京良院八百株乃

岩屋山金峯寺

出谷村乃ゟ西あり滋陽帝孫五畳一彩居ゟ十六町あり　眞言宗にて樓門に金剛力士坂安に額に山石屋山と書して　後奈良院乃震筆なり本堂崖造りにて本尊不動明王立像五尺餘　弘法大師の作之脇士に毘沙門地山脇にあり　藏尊坂安に又脇壇に弘法大師の作の像あり大日堂を本堂乃西にあり　則大日如来役行者坂安に

抑當山に久代天神醫道乃祖神藥王薩埵と化して出現し給ふ霊場なり其後　孝德天皇の御宇白雉元年に役優婆塞こゝに来て洞道坂踏まけさ山に登り敷月禪定坂滝し藥師如来の霊告を受て當山坂岡基に又厥后　淳和天皇の御宇天長六年に弘法大師山に登りまして神童出現して曰あるを者を待に待年久し早く二宗乃秘法坂滝し王城を鎮護し且一切衆生乃法願を成就し病悩坂扶助しまへと教へ給ふ當山乃守護神なりして飛龍と化し忽瀧に入給ふ墨にあり大師龍権現と崇め瀧のうへに勧請しまへを者又

金剛山
志明山
嶮塔山
香水窟
草庵
いろり
浅茅坊
護摩洞
文字窟
奥院
天井
本堂
鐘堂
大日

岩屋山金峯寺
本坊
二王門
山門より
桜岳嶽
ちや屋

権現の誓ふかくして大師これを不動尊坂彫刻し一千座れ護摩を修し
給へる是当寺乃本尊なり
○奥院本堂乃うしろ乃巌上ふ建て本尊不動明王立像五尺絵宇多天皇れ御願
崖造りにして白木なり代々御即位乃節い勅詔ふよりて寶祚延長
ふよりて菅神の御化なり天下安穏の御祈禱として御戸開あり
○天神宮堂前乃当山乃鎮守とし給へ遷宮乃時櫻一株一夜ふ生れ
故ふ櫻天神と號く
○飛龍瀧本堂乃後ふ岩屋瀧とも称ず瀧乃うへふ飛龍権現乃祠あり又
瀧壺のうちふ飛龍童子乃彩色石あり風狂の者当山へ来りて
本尊坂礼拝し瀧浴する事日毎ふ二度ずつ平癒を祈るに験あり
○弘法大師護摩洞瀧乃うへふ山所ふ於て大師密法を修し給へる事五餘
乃洞窟ふ山かくれの石毎ふ経文鮮ふ居まる是大師れ所化とし
○香水奥院の巌窟より滴出る茶王薩埵山水と穿出しく法茶坂
灌洗しる人へ苦れふよりて其香今ふおいて自然ふ薫ること久しく病

苦乃者苦れを服する ふ金ぞとして来れし未代とへども山香水乃譽
世ふ高しふかの薩埵仙人ふ化して諸薬坂調しる舊跡山上ふ
○役行者座禅石樓門の左乃方ふあり高サ壹丈
それ当山を豐嶺巍々として漢乃劉阮ら薬坂採し天台山の面
彩ある山谷邃ふして白雪封じ花糸寒ふして峭壁ふ趨る銀河
乃三千尺もさくみ見へてあるい花坂誘ひ紅葉坂連て舊
洞の水い三々と岩ふ流れて若鉛汞子暴ふ類じて山ふを
石室岩洞多くして壺中ふ天地を縮免神仙のおのづから家
ある乃寄境なり
棧敷嶽岩屋の小三十町餘山所四面みな山ふして嶽い其上ふこれ
にあり麓いふ西樹麗ふ所ふ山地の面れ方
あり是則惟喬親王遊覧眺望の高樓あり所ふ山地の面れ方
一面ふ晴て就鷲峰笠置の翠嶺生駒葛城の高根あるを難波津
乃かくまく眼中の客となりぬ絶頂ふ池あり むしろ山地ふ於く

土器金具乃類様々の器物掘出せしまゝ家に採納まこと怪異乃事ありてあるひは悩乱しあるひは狂惑に大に恐怪くえの地み送る返に足則ち乃親王の御所に用ゆる調度うりとかえむ
より此地に於て鶏鳴ありあり由緑故ありて又日比麓の林の中に
三本竹といふあり其左杖のぬし三本生じて毎年三本れ争故
生じ其長どるふおんで初の三本おのづから枯ぬ足親王乃鞭故
さしのくるぶ今に生ずるもを又此南れ山脇に岩間より清水湧出る
至て清泉みて寒暑に増減なし是い親王田猟し給ふ
鹿ふ此水に飼しを所之故に鹿乃水飲と号ふ
さしを樓臺空しく朽て千歳乃むかしと成ぬ薄荷萱
茫々と荒げて鶺鴒乃聲こと悲く風ゆ鬼火も変じて
枕風のみ蕭々として今ふゆかりて次
小野岩屋の小二十町餘ふあり小野村中村下村真方細河牧坂等すり

小野篁社 蓬ヶ峯乃西小長坂を経て東に内民居乃坤二町だりふあり
篁傳 参議岑守乃男みして左大辨従二位ゆ承和三年二月ふ
配流せらるゝ原故国に遷ふ同七年四月勅許を蒙りて帰洛に同
八年閏四月本位に任じ仁壽二年十二月廿二日薨を 五十歳
落葉宮 下村民居民一町とうふあり系神 柏木清門ふ公とうけし女之宮
乃霊として生土神と成例系九月十六日神輿一基
御栗栖野 西ふ茂大門村乃西の野を以て大門輿の御察の御馬
乃林を生を所之故ふ御の字を祀らしむ又此名花ふの南ふもあり
源氏物語曰 くるを聖のざうをこのうんの御馬草あんとてくのいせと云
冰室社 紫竹村乃小二十町餘冰室村ふあり神未考此所ふいてる南に
冰室坂 あり四面こふ山みして懸方巌岨ゆいうへはところふ
氷室あり
をのひむろれてふ結てのの花移ひろる
千載 下さゆる氷室乃山のそて掬清結てる雪うとそ見しを 源仲正
同 あしうさん涼うりゝて氷室山ほうせ水の水ゆるのこころハ 大炊御門右大臣
新續古 限あるとびうのこ雪乃消る日もそゆる氷室の山乃下山木 順徳院
延喜式ふ乃くうる氷室山城ふ及び諸国共ふ五百九十六所之
當國氷室乃地多くい廢して今絶遺まと

国立公文書館
National Archives of Japan

惟喬社 東河内村民家乃南ニあり祭神親王乃神霊なり此所の生土神とする倒系九月十六日いまへる神輿遷幸し土人棒これ形相放盡して行くぬ今断絶を神輿ハ同所安樂寺ニ納む

○惟喬親王傳 文徳天皇第一の皇子ミて母公ハ従四位下静子紀名虎乃女之親王小野ニ住居ス故ニ小野宮とゝゆ貞観十四年ニ出家し法名を素覺と云同十五年二月廿日薨じ給ふ 二十六歳

惟喬塔 同所長福寺ニあり十二重の石塔婆なり

山森 西加茂川上村乃艮鴨川乃ほとりにあり森の周一町計中ニ小社あり祭神詳ならず鴨乃本宮ニ属ス

二子塚 此乃森の西南田間ニ婦夫石二子塚とゝゆ艮鴨川乃あり由緒不詳

須義社 日所ニ乃端より二町ばかり南民家乃西ニあり祭神未考倒系ニ三月十日ニ日ハ祭礼ハ今ハ文乃家ニ伝ふ絵の祭ハ当社ニ執行ス勅使ハ当ニ一社ニ出ス云ふ

高雄山法華寺の縁ニ当所乃土人ハ高雄山法華寺の縁ニ委い来編ニ入る本集を行法師わかあり高雄山あれるなるつゝ哉やもしい花と散りけり

若緑松 日所真珠庵村の東南ニあり大なる古松なれ之其本ニ小祠あり祭神ハ船明神なり一説ニ此ハ地いあり百合艸若大たの宅地之常ニ愛する緑丸として鷹あり此ハ遊しとゝゆ故ニ名とゝ

御所内 同所乃小田乃字をいへ伝ふ百合艸若丸の宅地なりとゝゆ

小野道風社

小野庄坂村ニあり正一位武大明神と称を土人生土神なりと云ふ城の国ニ於て當宮一社のみ仕て日本三跡の一人なり勅請ある本所国風ハ天暦帝ニ仕て日本三跡の一人なり頭小野道風社略紀曰大内裏蘭壁門の額天徳三年五月七日本ニ頭小野道風書とゝゆ康保元年ニ卒を年七十一

小野神廟八詠 武神祠

工部芳聲大霊祠此然臨池千載業誰復繼斯賢 龍公美

寥々杉阪傍樹鬱明王堂不見塵寰色梵音風外長 明王堂 平信好

香水藏山頂炎旱曾不枯人言傷唱客歌即神効 和香水 芥煥

道風千載久書比晋人賢欲吊墨池古先臨盟渟泉 盟渟井 林義卿 芥元澄

一橋架峡岸臨眺自清奇恰擬半輪月思君在峨眉 思君橋 高道昂

淺深不可量朝洗僊人掌木末含芙荷翠色看來長 積翠池 大江資衡

風流野長公墨妙孰爭雄欲見威神赫原泉滚々通 長公川

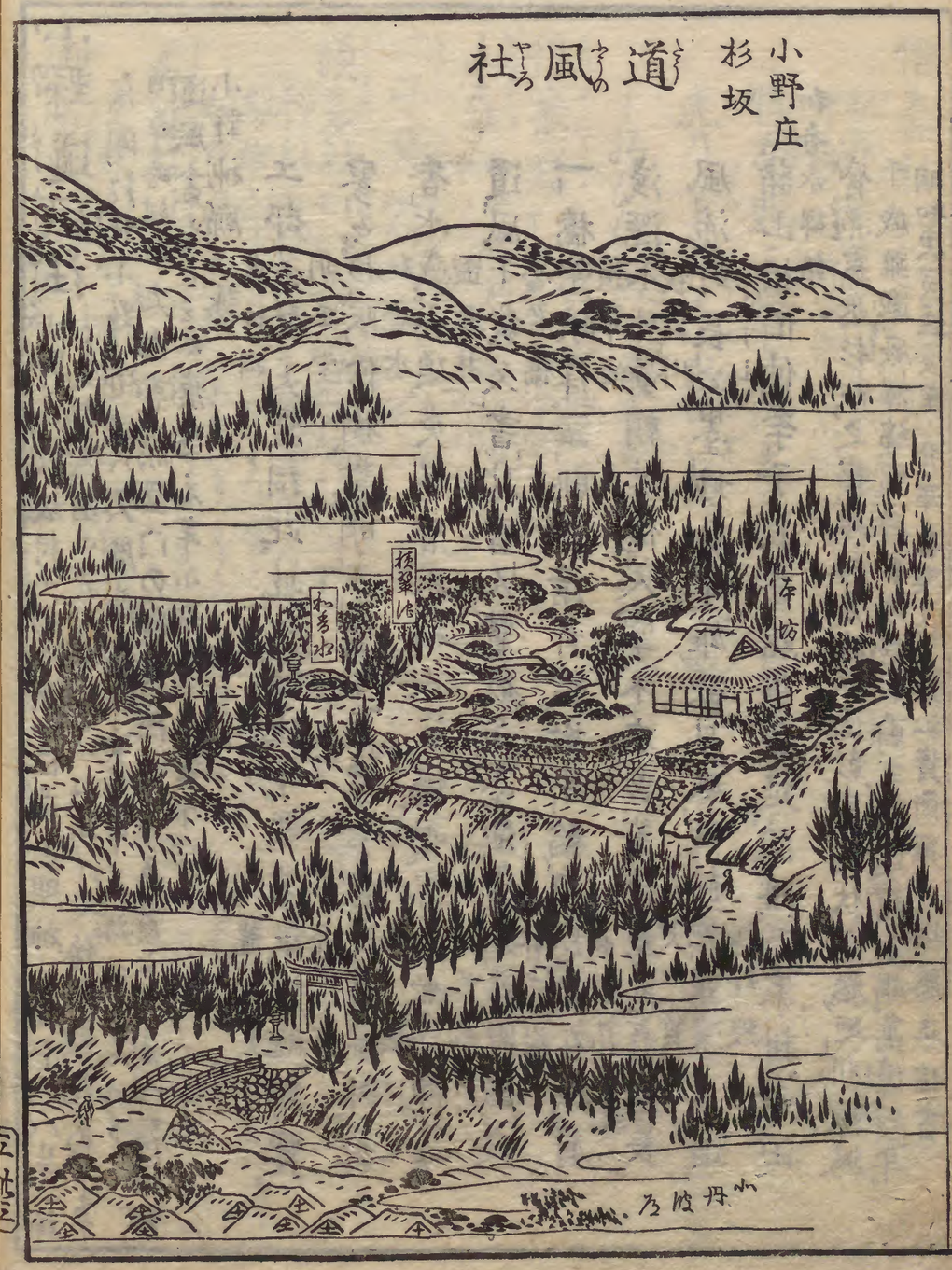
諸山相伯仲季子最蒼然誰逐延陵跡遯家耕石田 季子山 江邨綬

和香水碑銘

鬳沸霊泉。杉阪之巔。維神爰臨。令德彰宣。載伏旱魃。迺利蜿蜒。千歳雖邈。厥澤綿綿。辟公斯挹。式肅式顓。迄用不竭。萬億秭年。

明和庚寅孟夏望 井澤善興篆 大江資衡撰 近藤正信書

小野庄
杉坂
道風社



氷室の神社

本社

拜殿

氷室村

大宮紫野小野あり所祇園社
小野篁塚紫野雲林院卯辰の方二町ところ
紫式部塚上ハ櫻あり畠乃あいだふあり西ところ。花鳥餘情曰式部ハ墓所を雲林院乃
寺院白毫院乃南小野篁の墓の西あり。岷江入楚曰宇治の寶藏
乃日記ハを紫野雲林院ハ[illegible]式部ハ極那院僧正乃
許可ハ紙系ハて天台一心三観の血脉ハ入ると亦てハ雲林院乃
歯固ハ紙去めるも奏ゆ人あるもの
天皇塚雲林院村の東ハあり一説園融院の陵ところと惟喬社雲林院の南今宮神社所東の
若宮八幡宮神社所の西花の中ハあり傳云むかし所源頼光の居
館ハて其地ハ所ある所ハ初ハ叢をハて大廈ところ
頼光塚船岡乃南西ハあり俗云源頼光塚ところ
石不動金剛寺ハあり本尊の不動明王ハ立像六尺二寸脇士ハ金伽羅勢多迦
の二尊も立像ハて二天ところおよ高麗大あり共ハ石をもて
作る足弘法大師の作ところ安置ところ所ハ岩窟あり又堂内の地蔵ハ
安阿弥乃作ハて南乃壇ハ寶冠の釋迦佛又不動尊ハ安置足者
證大師の作と亦ハ像頭髪ハ
彩がくくるり

淨藏貴所塔金剛寺乃前ハあり不動石金剛寺ハ鏡石ところ一町ところ
六請明神社金剛寺の南玄丘乃民林の中ハあり乃上ハあり
十禪師社龍安寺門乃西ハあり本考土人ハ例祭ハ九月十日
生土神ハ例祭ハ九月十七日
仁和寺濟信法親王塔右のやしろ小二町ところ
宇多野仁和寺のかたらの大内山仁和寺のうしろれ
名ハ紙ハて
光孝天皇陵仁和寺山門乃西一町ところ車塚塚の南二町ところ
田乃間ハあり道乃ハあり
福王神社仁和寺の西福王寺村ハあり系所ハ光孝天皇の后寛平法皇乃
宅摩塚高雄道のほとりハ土人ハ例祭ハ九月二十八日神輿一基
明恵上人ハ信敬ハて宅摩
の二神常ハ擁護とかへるあり日宅摩明恵の室ハ至ふ障子の内ハ人時々
無ふして上人と話答乃聲あり宅摩ハあれと同ハ
春日住吉ハ紙ハて
窺人ハ西人ハ坐ハ光相ハ紙ハて
執ハ蓮ハ神相ハ紙ハて
おかて蓮馬ハて光と是即凡人神相ハ紙写ハ冥罰ハ
ハ塚ハ紙系て
験とうり
清瀧河梅尾高山寺門おの橋下のるれこれ源下小野より出て此地とるが
梅尾ハ愛宕乃藤ハ紙歴て大井川ハ入と

沖室花見
新古今
花の香ハ
袖ハぬるゝ
成みゝ
木のゝ陰
風のれ
きくゝ
貴之

暮
春
めけるハ
花の山
半時庵
淡々

地蔵院 紙屋川の西にあり。本尊地蔵菩薩。洛安に行基の作と云。聖観音と安に慈覚の作と洛陽観音めぐりの其一にして穿三十一番の札所なり

長名椿 当寺の庭中にいにしへ植たるとぐあり。花の咲へ瑠璃なる色をあらそひ実小八千代を歴へき。荘子の語のおもしろげなるべし

北野御旅所旧跡 下立賣紙屋川の西にあり。小祠あり。散神祭るむかしは祭礼小野より此所まで続た音樂おそ神輿成遷幸しまるなり

白樂天社 所族所の西南橘次宅地 本辻村南側畠乃字とうたうなり 俗云奥別金賣橋次宅と云拝三町ばかりにあり。寺乃地にて花園社を妙心寺の西一町ばかりにあり

花園 今妙心寺乃地主乃神 社記未考

協地蔵 下立賣乃西法金剛院の墨にあり。本尊地蔵菩薩坐像八尺にして弘法大師の作なり。六躰地蔵十王堂は境内にあり

極樂橋 地蔵堂乃西街道乃中にあり。俗云待賢門院は橋上にて阿弥陀佛聖衆と来迎の躰相を見給ひ人々ありなり

安居 所々に其後寺となし高倉宮の御子僧正道尊住ましし跡成安井御門跡と称せ世東に再興あり

龍翔寺旧趾 俗云御髪と藏る所なり。安居村にあり。後宇多院塔は所にあり

○足ばかり次下に図せるは右白虎の巻にして洛西北嵯峨あらしの常盤里入口尾等なり。北に城槇の界まで南は長圓山崎に至る

祥鳳山直指庵
客
本堂
純益
陸橋
客

細谷
廣益亭
開山廟
中興開基塔
門廟
佛殿
方丈
基所
浴室
表門

北嵯峨山
新古今

ゆくへまよふ
きゐ井を渡ふ
初かりれ
翔ふ雁の
よしの
枯風
白土左后宮の後成女

大覚寺

水尾　愛宕山一ノ麓居ノ左の街五十町ニあり

清和天皇社　日所ニあり續日本紀曰宝亀二年十二月辛未山背國水雄岡に幸して延暦四年九月庚子水雄岡ニ行幸して遊獵しまつりしこと云云

水尾陵　日所ニあり清和天皇乃御骨を藏奉る所なり民居なる東四町ばかり西乃山脇ニあり古松あり

三代實録曰元慶四年十二月癸未申の刻左上天皇圓覚寺ニ崩じ給ふ春秋三十一　天皇人儀甚美端儼にして神乃如し性寛明仁恕温和にして慈順なり外立領角を輟て言を發し舉動乃際ニ禮度ニ尊ぶ好書傳を讀思ひを釋教ニ賢に鷹犬漁獵の娯掌て意ニ忘るる疊々焉なりて人君乃量あり又曰同十二月四日夜酉の四刻左上天皇を山城國愛宕郡上栗田山ニ葬奉て骸を水尾の山上ニ置奉ると云云

水尾山寺　同所ニあり清和天皇崩御の後御追善の為詔ありて法會を修しまつる所に三代實録曰元慶六年十二月四日壬寅清和天皇乃御忌勅して圓覚寺又真観寺水尾等乃二寺ニ使を遣はし功德を修せしむ圓覚真観の両寺ニ幣綿各〻四百一十一屯水尾寺ニ八二百一十一屯

福田寺　愛宕山小坂ニあり御季料を用ひて本尊阿弥陀佛坐像二尺五寸

慶乃伝乃ニ基詳なり

後亀山院陵　當寺乃西の方ニあり後亀山院淵成王ニ坂村上天皇第二の皇子ニて南朝の帝乃なり南朝文中二年即位に其後吉野より移しまつりひ明德三年十二月入洛し左上天皇乃號を受なり洛ニ居し給ふ應永三十一年四月十二日崩じ給ふ御住居乃地詳なり

仙翁寺　愛宕一鳥居乃東ニ仙人住しる世寺とも仙翁洞とも仙人乃脇ニあり草庵乃仙翁洞ニ仙人住しる

定家卿塚　小嵯峨平山乃南畠乃中ニあり仙人山伏塚と云卿の塚所なり

生六道　清京寺乃戌亥ニあり六道と生六道と云ふ小野皇平世ニ小野篁乃造る所なり

中院観音　中院町定家卿の御宅持佛堂乃お氏家會合所ニ安置ニ本尊を昨日定家卿乃庄乃ある所乃観世音乃由来ハ

西行法師庵跡　二尊院中門の西南萩の内ニあり

崇集　とらの小倉の山れをそ近くなるをもいつるんう郭　西行

辨財天社　日所龍女の化の所なり由来編ニ

水尾村
清和天皇陵
四所権現
圓覚寺

化野
念佛寺

五所明神　北嵯峨大澤池の西にあり祭神八幡　加茂
春日　住吉の五社なり　此所に大比叡ありわけて称ふ淵々と流

菖蒲谷　同所大覚寺の北にして怪備せり　水源は菖蒲谷の比叡ふかし出る足則角倉了意の紀まる所
堀抜川　寛文年間中田畑乃用水に労しむ了意之を
坂めくらし破り夫畦下坂りて菖蒲谷の土中坂砥抜せて左右に石垣坂
抜具うへに橋をかけて比叡と通る長数十町に及ぶ北流に流れ
水溜くと通じ旱魃の年は山下の郷中田畑乃用水に労しむ了意之を
坂下に書院乃田畑永く枯と成る今百餘歳を経きとし破壊せん流
うきとうきとう大井川の通船乃功は嵐山大悲閣乃碑銘に見へたり

祥鳳山直指庵　隠元禅師の嗣法獨笑乃草創なり
療病院　嵯峨釋迦堂境内の小例に有り保元宗西記に本尊は第四仏弘法
大師乃作なり坐像七寸計むし弘仁九年の春天下一同
疫病流行を嵯峨上皇宸襟悩しめ弘法大師に詔ありて疫病
除滅乃祈禱をふさむ心願七晝夜を限て一刀三礼して仏本尊を周刻
を又帝紙金泥乃心経を書写しゆい弘法に命じて同板
仏らし禁裏に於て開眼祈誓しまつる至て天下の疫鬼ことに舎して太平を祝
之帝御塔　小倉山二尊院佛殿の西にあり後奈良院
中央　南の方嵯峨天皇
圓光大師廟塔　同所西乃方にあり碑銘を建は文字分明なり後一説に
宗景瀛が撰なる所なり
鼎淑孺人墓碑　同所にあり文筆共に伊藤東涯の
撰なる所なり

落柿舎　小倉山下緋の社乃うしろ紀本町にあり俳士落柿舎去来の旧蹟なり
去来人姓は向井名は元淵長崎聖堂乃祭主向井元升の二男にして芭蕉翁の門に学び蕉門英雄乃
一人なり宝永元年九月に没せり

落柿舎記曰
落柿舎に柿の木四十本あり又多
くの柿ありこれを代かゆるとき持来りて
天の帝のわくみふもを待むとて屋敷より者爲うしてまかり
人の来り立木かい求めむと一貫文さし出し悦ひ買ぬ翌
屋ふたそこふとなりくるふところくとなる根ふたしかひしく
来らり猶ほくとあ詠先ふ和むり爰乃ほり白爰
出るまで仕来成業しかくだり落ぬる柿を見たき
の人乃價のしかれてむやと侘いと侘ふけ捨ばゆるしやはも
仕者の人ふ友とらの弔へ消息送りてこれり落柿舎の
去来と書り名々り

柿ぬしや木を売いちりの安くしこ　去来

近年去来の末族仕士井上重厚舊墳ふ
落柿舎祝俗補し具像ふ仕り建て
落柿舎ふ
を墓し行る
を石ふ鐫ち

五月雨や色紙まくれし壁のあと　去来

下嵯峨

車折明神社

祭神ハ後白河院乃
近臣清原頼業卿之
此人聰明物覚ノ
風流ヒ好ミ桜花紙
愛シ給フ故ニ社頭ニ
桜多シ車折乃
由縁前編ニ見ヘタリ

鹿王院

舎利殿の宋風
より移されし佛舎利
放安置毎年
十月十五日舎利會
あり由縁お編
みえくり

佛殿
方丈
寺中

嵯峨
臨川寺
川井大

嵯峨野 三代實録曰元慶六年十二月廿一日巳未勅して山城國葛野郡嵯峨野
を舊田獵地制せ令新に禁地加へ樵夫牧豎乃外鷹狗放ち鬼
狐逃し来ること勿れ之れ亦た別莊かそくあるて名所旧跡
傳記詳なるさるいまるるさだ多くくお編ふ乃久へうり源氏の邦
上源氏下源氏乃ぬ名うり今い民家建ちたて邦とうと所多くい
船しいへうり野山原とも
和歌に
新古 さらのふ代乃ふる乃ふるあて又寄ふ乃ふ月乃韵 定家
新續 夕暮い秋のさ邦れ森のまふこれ源れ寄そ出ゑて 前左政大臣 忠定
玉吟 むくこてとてとて月をさやふて浮世とてにさるれ山ふ 家隆
兼明親王亭 今野乃宮の南に旧蹟あるは親王い延喜帝第十六の皇子ふ
て文学詩賦に達しさまへ右大臣に任じ北に閑樓乃
起い貞えん二年乃夏関白兼通公のとうしかてか宇多帝の孫源雅信なる右大臣と
中務卿に任じ賴忠なる左大臣に任じ宇多帝の叔父なるゆへ関白兼通忌悪んで右大臣
に兼明親王い 後中書王と号ふる 村上帝乃皇子中務卿具平親王も詩文に達し給へ
乃権なる奪ふ又 今上圓融帝乃
故に兼明親王と前中書王と称し
具平親王と後中書王と号ふる
亀尾瀧いへへ亀山乃中にあり山崩れ溪流絶へ久
るし山乃麓に後源院 後又亀山院も ふ仙居し給へ
著聞集
むくこぐら帰て沛政をでうく沛ふもちわも多くみふれそう

また大井河乃山左なる仙居ふうしてれそうまた造営乃
事い権大納言實雄卿乃さそそ聞えし水乃ふ乃ふ乃ふ
つくり所うり所なる所うり東を廣隆寺常盤乃杜西を
前中書王乃ぬそれ乃ふ倉ふ乃麓つぎとれなるくさしぶ
自然の勝地なり有い大井河乃ふ乃ふ乃ふ乃ふ沛寺乃そ鉢
うりのはそこや乃ふ乃ふ乃ふ沛寺いされ院乃沛時
なり

増鏡云
源氏乃蘇大井川乃ふの岸ふあそうてゆした院とたそう
せすへはふ倉ふ乃桂戸離宮乃離もさふそう沛垣乃内ふ見へて
つぎやはたくろいぬ千載しおのはそうそう勝負くそえそう所そう
いそうぎ絵師とそうそう筆そうひぎそう嵐殿乃ふそうひふいぬ
わふそうて西ふ義草院東ふ如来寺院ふどいふもなり橋乃
左后乃むそう立られし擬林寺といひしそう今そう破壊しそうそ
そそそそそうふ成そうれて其ふ金剛院とそう沛堂をそうそさせ
そうへふふ乃兄上人なる長老ふそうれて御土宗なるそう天王寺
乃金堂なるそうさせそうまそうひて多宝院とそうやそうそうそう川ふのそうそて
さそうた度はそうそはふ大多勝院と聞ゆるふ乃そうそうれ沛持佛そう
さそうまそうせすへそうそう

續古今集
亀山乃仙洞ふ吉野の山乃桜なる あまそうそう作りしう
花のさそうそうそそ
春毎ふそひやそうれそうみそうれ 左上天皇
徒然艸云
亀山院ふ沛ふ大井河ふ水なる風流なそうそう大井の土民ふ作く

山本

水車をつくらせられけりおほくのあしをたまひて数日にいとなみ
出してかけたりけるにおほかためぐらざりければとかくなほしけれど
つひにまはらでいたづらにたてりけりさて宇治の里人をめしてこしらへ
させられければやすらかにゆひてまゐらせたりけるがおもふやうにめぐりて
水をくみ入る事めでたかりけり

後嵯峨院陵 舊地天龍寺方丈乃西にあり今詳ならず 文永九年二月十七日亀山乃別院薬草院におゐて崩御し給ふ
聖壽五十三歳

亀山院御塔 今天龍寺乃西の山に塚あり古木森々として此所地中にあり
これば騒動を恐くハ此陵なるか 紹運録曰嘉元三年
九月十五日崩御し給ふ聖壽五十七歳 増鏡曰亀山殿乃上の山に
火葬し法華堂を立て御骨を収むと云云

大井川 水脈前等にかはる 一名葛野川又西川ともいふ

後撰 大井河うかべる舟のかゞり火にをぐらの山ハ名のみなりけり 業平朝臣

同 水上に紅葉なかれて大井河むらごに見ゆる瀧の白糸 堀川右大臣

千載 大井河かゞりさしゆく鵜舟いくせに夏の夜を明すらん 俊成

古今著聞集云 亭子院の御時昌泰元年九月十一日大井河に行幸有て
紀貫之和歌乃假名序をかけり
あはれ我君乃御代長月のこゝぬか昨日といひて残れる菊見
たまはん又暮ぬべき秋をおしみ給はんとて月のかつらのこなたに
春乃梅津より御舟よそひて渡し守をめして夕月夜小
倉の山のほとりゆく水の大井の河辺にみゆきし給へば久方

乃空にハたなびく雲もなくみゆきをよろこびながるゝ水ハ底に
すみてちりなくておもひ〳〵に人はこゝろをかよはしそみことのりして
秋の水にうかびぬるハながるゝ木の葉とあやまたれ
しみ散てちらぬ色あるハ菊乃花の岸にのこれるかとうたがふ星
かとおどろかれ霜乃鶴川辺にたちて雲のうへよりくだる
夕べの猿山乃かひに啼て人の泪をおとしかりの雲路に
はるかにて玉章かとみえあそぶかもめは水にすみて人になれ
入江の松いく世へぬらんといふ事を讃せさせ給へるこのみ
心乃このもかのもにまどひぬるにこのたび吹風乃色にそれ
ば草乃たのしみ露とともに泪落岩浪とともによろこびたる
んぞ(?)心ちかくてことしも今(?)をのぞまむことにくらべて
後の人まさにこのうたをおもひてながくきくへし志のぶ草の
のぞきてかしこめ

法輪寺 由縁ハ縁起に詳なれば爰に略す 其圖を起して景色を顕はし
梢のさくらのちかくし見へけり櫻花がくれにかくれて弥生乃さくら見は
都下の騒人きて詣しある大堰の川辺にやすらひて
酒をもち渡月橋の行人を下にながめて
秋ハ嵐の山乃紅葉で戸無瀬の瀧にあふぎ見にあそぶ
塚ハ西行櫻裏橋はこゝに鈴鐘して
来るに
法輪に籠りたる人の同じく帰りしまゐらする

家集 詣ける人は皆ひとしく帰りぬるをも宿れる峯の松風 兼好

嵯峨
法輪寺

地蔵

不動堂

行者

ほうろう

ほうろう

茶や

茶や

明星社

本堂

方丈

立花の社

玄関

庫裏

ねちハ
ゆ
ち
の五木

大悲図

嵐山の西渡月橋より十町ばかりにあり尊い千手観音恵心僧都の作なり立像三尺ばかりの面の脇壇ふか角倉了以の像成安置した法躰にて衣を着し七十石余れ相形手に石割斧を持て石上み縄なし圓坐し片膝を立て坐をし人大井河の巌石を多く破碑き丹波国より舟板通りむ足二列乃益みてむうるる今ふ舟筏にも自由之了以碑石図のお左り側にあり序銘林道春撰する所なり

吉田了以碑銘

古云舟楫之利以濟不通嘗聞其語矣今有其人也了以叟其人歟了以姓源氏其先佐佐木支族騙吉田者宇多帝之後也云爾世住江州五代祖德春來城州嵯峨因家焉其所居乃角倉地也洛四隅各有官倉在西曰角藏語在沙門石夢窓天龍寺圖記中德春子宗林宗林子宗忠皆潤屋也而仕室町將軍家宗忠子宗桂雍髮遊天龍蘭若嘗學醫術一旦從僧良策彦適濵渤赴大明明人或稱宗桂號意菴蓋取諸醫者意也之義還干本邦其業益進娶中村氏以天文二十三年甲寅某月某日生了以譯光好小字與七後改名了以性嗜工役嘗雖志筮仕而未貴事信長秀吉矣及干

前大相國源君之治世也而初出奉拜謁焉慶長九年甲辰了以住作州和計河見舟船以爲凡百川皆可以通船乃歸嵯峨沂大井川至丹波保津見其路自謂雖多湍石而可行舟翌年乙巳遣其子玄之干東武以請之台命謂自古所未通舟今欲通開是二州之幸也宜早爲之丙午春三月了以初浚大井河其所有大石以轆轤索牽之石在水中構浮樓以鐵棒鋭頭長三尺周三尺

柄長サ一丈許繫縄使數十餘人挽扛而徑投下之石悉碎散石出水面則烈火燒碎焉河廣而淺者帖石而狹其河深其水又所有瀑者鑿其上與下流準平之逮秋八月役功成先是編筏纔流而已於是自丹波世喜邑到嵯峨舟初通五穀鹽鐵材石等多載渭民得其利因造宅河邊居焉玄之嗣焉子嚴昭受傳之玄之能書且問儒風於惺窩先生有年矣一旦招先生遡遊于河上奇石激湍甚多請先生多改舊號其白浪揚如散花者號浪花隈大瀨其齊沮環石者號觀瀾盤陀有石相距可二十丈猿抱子飛起其間者號叫猿峽鑾谿東有山巖高嶮有捷鶻之危巢者號鷹巢石壁斗絶貌如萬卷堆者號疊書巖瞻銘此處有石似門廣五丈高百餘尺者號石門關有湍急流舩行如飛號鳥舩灘鑾谿川灘隣於水尾世傳清和帝嘗來觀魚于此焉岸有山岩高可五十丈其下水平衡如水載山取山下出泉蒙之義號曰蒙山皆有倭歌在其家集惺窩所遊觀止此焉復各石方三丈許其面如鏡聳於水崖號鏡石又有浮田神祠世傳邃古之世丹波國皆湖也其水赤故曰丹波大山咋神穿浮田決其湖於是丹波水枯爲土乃建祠而祭之以鋤爲神之主此神即是松尾大神也下此則愛宕龜山在左嵐山柱右其勝區不可枚數十二年春丁以奉鈞命通舩於富士川自駿州岩淵挽舟到甲府山峽洞民未嘗見有舟皆驚曰非魚而走水恠哉恠哉與胡人不知舟何以異哉此川最嶮甚於嵯峨然漕舩通行州民大悅十三年又自信州諏訪到遠州掛塚可通舟天龍河否了以雖即漕盪然無所用故至今舟少方是之時營大佛殿于洛東大木巨材甚勞挽牽了以請循河而運之乃聽之於是自伏見里浮之河泝而拏焉了以見伏見地里於大佛殿基可六丈即壞其高爲是於卑處若河曲處置轆轤引起復浮水水平如地先是呼許呼邪者五丁憂之萬牛難之於是水運不勞力不日材木悉達人皆奇之十六年了以請行舟鴨河乃聽之因自伏見河漕舩遡上流達二條至今有數百艘遂搆家河傍使玄之屈之玄之男玄德嗣焉十九年富士河壅嶮舟不能行

鈞命召了以有病玄之代行治水又能通舟三月始役七月成之聞了以病急告假玄之未入洛先二日丁以歿實慶長十九年秋七月十二日也時六十一歲此年夏營大悲閣于嵐山山高二十丈計壁立谷深右有瀑布前有龜山而直視洛中河水流於龜嵐之際舟舩之來去居然可見矣其疾病時謂曰須作我肖像置閣側捲巨綱爲坐犂爲杖而建石誌玄之等從其遺教玄之錄其事以寄余請之記件件如右昔白圭之治水以隣國爲壑張湯漕褒鉞嶮巇不能通今了以跡大井河瀹鴨水決富士川凡其所排通釃開則舟能行不臭其載人皆利之與白圭張湯所爲大異矣所謂舟楫之利以濟不通者不在茲乎宜哉垂裕後昆余與玄之執交久矣故應其請書焉且旌之以銘其詞曰

排巨川兮舟楫通浮鴨水兮梁如虹矧復鑿富士河兮脊成功慕其錫玄圭兮笑彼化黃熊嵐山之上兮名不朽而無窮

寛永六年冬十月日

野依島倉宮の御子塾居しまひ給ふ源の倫のおりはた由平家物語ふ見へたり
今祢宜次本曾義仲上洛して暫く主ふすゑ故ふ本曾ヶ宮とも称した

別雷峯　松尾社乃山上ふ位置ふ所ふ巌あり
松尾神降臨の所なり
松尾神詠云十山城乃別雷山尓宮居士亭天降古登神代與利佐幾

最福寺　松尾の南松室村ふあり浄土宗ふして本尊ハ阿弥陀佛ふ安元年ふ延朗上人の開基なり久しく荒廃ふ及しを再興して拵し建て所なり延朗上人の像当寺なり安元年ふ当寺ハ安元二年ふ延朗上人在世の時佛工ふ命しくふのんぐ作らしむる所なり

峯堂谷堂　舊跡ハ葉室下山田乃西ふ上ふあり法華山寺と號して延朗上人乃開基ふして四十九院十二の楼閣五重乃塔三間四面乃輪蔵等あり老巌院惟宇正慶元年四月九日千種頭中將の軍ふ羅ふ灰燼ふなる其後小堂ふなれ共南面の乙上方二町ばかりの所ふ石銅鉄の具土中ふ埋ふ古城ふ委ハ記ふ見へたり今下ふ田の堂乃本尊薬師佛ハ今下ふ田の内小堂ふ安置ふ尊像所く焼損ふ谷堂乃本尊ふ十一面千手観音ハ今下津林村ふ安置ふ

真如寺　葉室乃山上ふあり法華宗ふして中興寂遠院日通洛陽妙傳寺の十二世ふ万治年中ふ再興を為ふ舊ふ二議良縄朝臣乃建立ふして天台宗ふ旧地ハ今の地ふ西の方へ去る半二町ふ平尾乃ふの上ふ土人具地と古真如寺と称ふ初建立乃由緑ハ二代実源ふ見へたり真如院とうばく正慶元年谷堂と共ふ焼失ふ今意覚大師の作ふ聖観音の尊像ふて当寺ふある

神代三陵 延喜式曰 日向埃山陵天津彦火瓊瓊杵尊 日向高屋山上陵彦火火出見尊 日向吾平山上陵彦波瀲武鸕鷀艸不葺合尊

已上神代三陵於山城國葛野郡田邑陵南原祭之其兆域東西一町南北一町 云 此三ツの陵今詳ならず文德帝の陵れ南二町ス件乃塚れ乾二十餘所 俗傳の面ふ小祠あり

是又神陵ふ塚一ツあり是陵乃移る所ふ

大梅山長福寺 東梅津 禪宗ふして佛殿乃本尊ハ釋迦佛脇士ハ普賢文殊表門の額ハ長福寺と書ちて世尊寺忠季卿の筆佛殿の額ハ祈禱とあるて筆者詳ならず開基ハ月林大幢國師大元國入て法號茂古林ふ嗣かの國ふ於て佛惠智鑑大師と號を是則大元乃文宗帝の勅號ス普光大幢國師ハ号ハ威後七年ふ及ぐ後村上院の勅號ちるス花園院ハ帰依あり即山帝れ帰塔所を別傳院と大寶輪と號を宸影の畫圖當寺ふあり上の帰瀆ハ帰宸翰ス

予カ之陋質法印豪信 干時暦應改元無射之候也

岡山塔號圓明と号ハ同所清涼院ふあるを

抑當寺の初ハ天台宗ふして真理とハ女僧れ建立ス それより年久しくちて亡墨ふ梅津左衛門清景と ハ者あるて月林和尚を尊信を其時清景當寺號領ス忽和尚ふ附與して禪刹とちるを

梅津左衛門塔 長福寺の門外ふ町

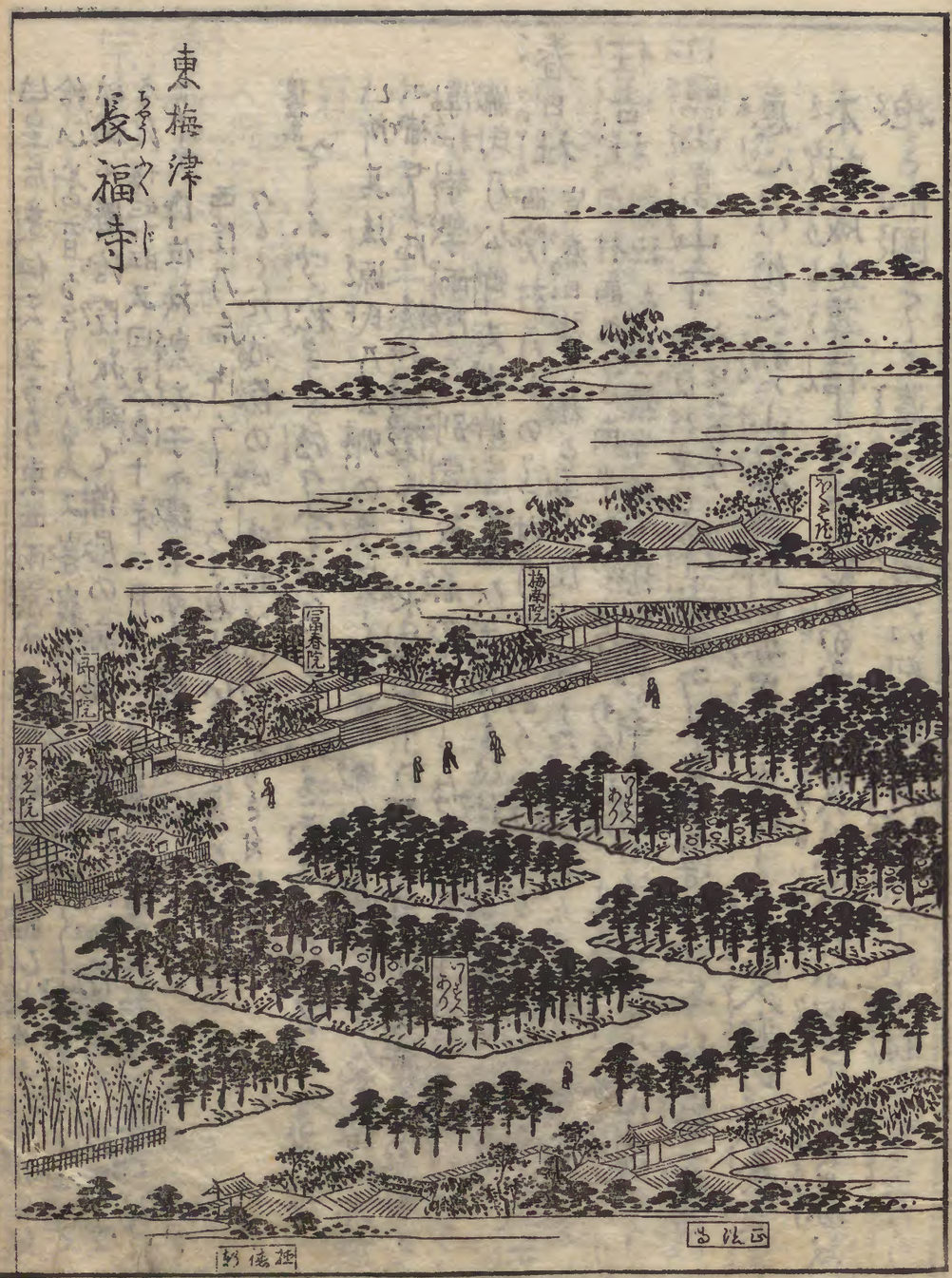
山之内 二條乃西千本より十四五町ふあるを所ハ大内裏れ時長安号ハ今村の名と ハ則草堂ハ傳教大師の画像あるス里乃西端に山王祠あるれ今ハ之内庚申として祥を霊験いちぢるし

徳成寺 山之内街道乃西ちと南側ふあり洛陽西六條興正寺乃末所那ち古親鸞聖人愛宕月輪寺へ詣しちるれ所ろ

舊跡

西院 四條乃西千本より西六町ちるふあり本名淳和院 拾芥抄曰 橘太后家とあるを太后淳和帝乃后ちるを三代實錄曰 橘太后諱ハ正子嵯峨天皇乃長女仁明天皇と同腹乃后ハ姿顔美麗ふして後宮乃后第一ちて尼あり承和七年五月淳和帝崩しあるを同九年嵯峨上天皇崩ちと皇太子遺て淳和院ふ勢ふ遺て諸寺の名僧延ちて法華と講居しあるを貞觀二年五月淳和院ふ於て諸寺の座主圓仁大阿闍梨ちて大齊會ふ設ス延暦寺乃座主圓仁大阿闍梨ちて菩薩戒ふ施ちて法名ふ設ス良祚と ハを元慶三年三月廿三日薨ぜ

東梅津
長福寺



以皇后慈仁天至うり東西兩京の稟兒孤孩を拾ひ救めきれ小乳母坂
給ひ昔なるさうめ又崖巌乃故宮と精舍〳〵大覚寺とるづく
以側小濟治院坂建て僧尼の病者坂療に淳和院をいて道場とし
うに巻三十五日記ニ曰天長十年二月廿八日乙酉 天皇淳和院小遷幸ぬし
きて淳位坂皇太子小譲ラ給フ 同巻十四丁

西院乃后淳ケ宮おろさせ給ひ
ケるくれ院の中清松とけうてうきなはるる

後撰集 素性法師

とふ人ぞ松ケうし清ケそなるむかしをあまを住ケり

以所其後源氏乃公卿の学堂しに故小源氏の長者なる人當院れ別當
小補せ淳和華學兩院乃別當坂兼帯せ淳ケ宇永徳三年の春鹿園院義満公乃大だ内
源氏乃公卿太中納言小及び大だ内も以任坂兼帯せ淳ケ
春日社西院村乃小のうさ林乃中小ありいみへる神祇官小ふる故小神祇
官春日社と林を玉人産沙神と以例ふ小九月九日乙神輿二基
住吉社同村西の南半町ケうい小へ伽藍ありて
當社を即鎮守ケうい乃の家を寺の内とうに六月廿八日淳坂ある
日照山高山寺西院村東の澤土宗小て本尊小子安地藏菩薩
入口小あり
恵心乃化乃初小山嶽横川小安置しかひしらあん入寂の後志賀里
木村成近尊信しきれを家小安に其後逆乱小罹て以る縁坂
抱き小國さて落行ら家小江別堅田れ傍田中れ平林小棄置ケう

まうり以所夜毎小光明赫奕して白日如し村人出れと奇ケうして
彩〇見ケふ地藏尊を浮ケう即小堂を営て田中の地藏ケると称を其後
文永年中堅田住人名村小左ヱ重俊夫婦子のうれ本坂坐て以尊像小
祈誓ケれど忽性身小成月満て男子を産ケう是ケう子安のそ像と
号ケ又暦應の比足利尊氏將軍淳帰依ありて居の西今れ地小遷佛
仰附られ洛陽六躰地藏巡て乃其一尊と ふ人 第一壬生ケ第二高ケる第三蓮華王地藏ケる
第四川崎清院第五祇陀林寺
第六鳥邊野寶積寺以六ケ所と
小乃方淳平産れ験ありそれケう累年以地小安置して亜應ほとく隆と
冠石當寺本堂乃お法寺乃傍小ありて 楊松本堂の後庭上小ありて枝葉壯
高サ六尺餘冠の形とうに 麗ケて以類ケ松を好むの
きて以ケうの本ケ尊賞ケう年多し
又樹家ケれを見て規範とそ以
秀傳庵同村春日社乃巽小ありて禅宗妙心寺大光院乃隠居所ケう
本尊阿弥陀佛恵心の化乃作と 本尊聖観音ケて禅宗黄檗派と
宗圓寺同村街道の南一町小あり法源和尚ケう門の額宗圓寺小掲げ堪乃
筆ケう當寺乃什寶小歌金一口あり後水尾院乃淳寺附之兩の環
黄金ケて歌小ある濃とスて樹ケう者代の名者ケう

寶藏院同村宗圓寺の南に隣る浄土宗報恩阿弥陀如来と則當村の
草堂として又山寺乃西に左田氏として農家あり古ふいへ
より傳来乃こ尊佛あり阿弥陀佛坐像五尺計脇士に観音勢至
むかしい寺院なり其本尊なりと住吉社乃南と山所の家も寺の内と号して
今民家に安置なるなり

野宮西院村五町なり住還乃西林の中にあり山所に崖峩に同しく齊
宮乃居所にて際齊の地なり今西院春日明神所なりと

西四条乃齊宮のりふ花にはけそほるなり　敦忠

玉葉
白ひさとく咲る花とも君ならあはしはやしく色添なり

正し

はやばらしぬよる白く花なれば我さへ色もやはるる　稚子内親王

清泉野宮より南一町なり小地にて方四間なり地中に祠あり
清水祠と称す神詳なり旱の時雨と祈るに効験あり

天文臺西七條の南梅小路土浄門家晴明社旧所にあり社殿再建す
邊内塚の内にあり

御所内西七條乃南七町なり山地にあり山所に馬場と称す高貴乃別荘あり
故に浄所内と云山所の小字なり

勝定院浄所内の中にあり本尊阿弥陀佛坐像二尺五寸去日社地之
内へ真言宗今浄土宗

越前幸林房塚同所第二町なり
傳説詳なる

福源院川勝寺村にあり山号へ大架山にて川勝寺と舊記なり今里乃
小路の本にて地あり塚のやし是則塔なりし所なり又南なり

堂の内とふづる地乃字なり
寺なり川勝寺村に舊記なり今里乃
傳建立の舊記なり
行基乃作なり開基詳なる

津寺川勝寺村に往還乃側にあり本尊薬師佛立像六尺

三宮日吉神輿の浄旅所なり神松尾に同し系日

桂里桂川の西にあり上桂中桂下桂と三村に分る
京極家の別荘あり殿舎花美なり。宮。里和歌に詠

京巻名
桂宮
古今
桂なれと月はなれなれるなれる光を花とちるなる紙
久かたの中に地ひさる星なれば光紙のうへにあらはる　伊勢
後拾遺
うつふまりてわを林花とよめる
新古
久しさの中なる川はひ無ふ契をやこ紙まつん　定家
続後撰
うつふのうさ乃花は紅こきあの別ぞふい色紙　実方
年奥に山河の名産みて
乃久しう今も領主より千鮎
六帖
朝ふく日沢侍る桂鮎あゆ紙こぶ乃もの　信實
天子へ上るとて和歌
毎日
藤原兼房山荘
桂の山庄
後拾遺
桂の山庄みそぬ乃ひて降ぬ乃ひて
紙ふも絶ぬとそ
とする内なる内へ
家紙
藤原兼房

案内ふくして
鞍馬の辺乃坂
行ハ好ごろ
雪解の旦名ニ
乃渡細谷川の
おがまもわ場り
て渉るふ足とる
ぼ文傍徳大井川
ハ石荒くして
渉くゆる所も
足板入まで粉び
例まて閑る
来多しこれぞ
老を恵るれ時へ
近憂あらん
の誠なるへ

老の坂

伊勢宅 むかしの歌人伊勢女此里に住けるよし詠歌にみえたり
いせがつての家におはして梅の枝にむすびつけさせ給ふ
新拾遺 梅乃花香さへてのどかにちりぬらんにほひそふるゝかれてまさらん 亭子院

御霊社 上桂下桂に同神両社あり土人生土神とす例祭八月十八日神輿一基あり祭神上桂社ハ火雷神下桂社ハ橘逸勢の霊なり

保古羅明神社 久世乃南にあり祭神不詳
土人生土神とす

子敦盛舊跡 下久世乃西寺戸村にあり旧跡今ハ此とし傳ふ此地に敦盛の室蟄居して男子一人誕生す其より源氏乃代となりて平家の裔孫をさがしもとめしかども君に給ひて一命助かりける乃下松に捨られけり旧跡に住居する者いへどもより皆怪異ありて遂に住人絶ぬ故に畠とされしも又五穀實のりなきとなしそのちらス此とするとなりされ耕作を憚を断て耕こなし

蓮生寺 上久世乃西下津林にあり宇津宮蓮生法師の建立ともいふ一説に熊谷蓮生が住しといふ未詳

観音堂 同所にあり西方堂といふ初めハ堂宇巍々たり今ハ草堂なり本尊十一面観音立像八尺計にて慈覚大師の作なり元ハ葉室山峯堂乃本尊なりといふ

大原野 王城より凡三里にして丹波街道樫原の未申一里にあり大原野ハ惣名にて中に三ッ乃村あり北野田都川南條といふ

後撰 大原や小塩の山の小松原はや木高かれちよのかげ見ん 貫之

續古 小塩山松風さむし大原のさとれてねやさえまさるらん 中務

善恵上人塔 西山三鈷寺の山下三町ばかりにあり碑碣を建けり 傳に云く上人諱ハ證空姓ハ源氏天暦帝の皇胤にて賀州の刺史親季乃子なり治承元年十一月九日に生る此日家に祥瑞多し久我内大臣通親卿児の聰敏なるを喜て養子とし既に冠禮乃儀におよぶ所童子出塵乃こゝろざしあるにより母公憂てこれを辞を其嬭子するゆへ父母愛情してこれをゆるさず一條戻橋乃上にて試に占ふに其時僧来り過るとて眞觀浄観廣大智恵観悲観及慈観常願常瞻仰の偈を誦するに値よりこれによりて其法器なる事を悦び遂に許し南都官寺を撰ふ童子これを以て是れ願を名を願ふ其所ハ吉水上人にありて父母禮を篤して吉水に贈は源空上人の曰今道世門に入らんとも期する所なれバ須らく此に黒谷の經藏ハ已に法遶房に属しむ吉水の坊も眞觀房に附しをはるとまたれにも附属の地なし童子乃曰今師に帰する事出離乃為にして又餘の望なし上人童子乃發心其言のおもろうなるを感して即日弥陀戒を授け名を善恵と改名し剃髪乃時金色の觀音盆水の中に現ず是を建久九年の源空上人月輪禅定殿下の請によりて選擇集を著れ善恵を證にして文義を考定し殿下の曰師の滅後に至って倫此書に不審あらバ誰人にか決せん上人曰浄土乃興旨此書の要義ハ悉く善恵に附属す我に異ならずと殿下善恵を崇信しまことに初に倍せりと師に親炙する事二十三年都鄙に於て伽藍を建立する事十二區遂に宝治元年十一月廿六日白川遣迎院にて入寂す年七十一世に西山上人といふ浄土宗一派の開祖なり

佛殿
方丈
終南
永正寺入口
村

物集女
永正寺
八幡
表門
池

西ふみ行くるはむし　紙きて

續後撰　草ふかくやとのあるじと法ふかき世を住るむしの聲哉　慈鎮

西ふり行くるれ雪は降くるふ

續載　はるかなりしられぬとも春ぞ行のそれの庭乃ちる雪　慈道法親王

世紙のくれて後西ふはるこのりてそ人ふかつてくる

千載　住すれしやどをい生て西之行月を待ひて示ことそれ　平實方

寄司院乃按察使西ふみそ世と道結ぶる紙歟てはかつてくる

續古今　忍えり月ふるものこと有ふ心ふれやこのそれなるの世や　修明門院大弐

かへし

入ふ紙ふれ世乃ふかふくさあてふ月ふ心ふれやこいそるそれ

長法寺

栗生光明寺ゟ二町ばかり南ふあり又村の名も長く天紙宗ふして本尊ハ観世音坐像一尺余胴基ハ千観法師なり

當寺乃什宝ふ唐筆乃涅槃像あり其形縦九尺横四尺又六寸圖る所ハ釋迦如来涅槃ふ入ハ後再ハ金棺ふ出て光明紙照しのハ紙菩薩羅漢四衆鳥獣等釋迦ハ拝る体相

うるはれハ釋迦ハ摩耶夫人ハ経之迦佛ハ冊ハ利天ふ昇ハ摩耶夫人の為ふ出現しのハ

阿那律　開世尊　起合掌曰遠屈下來復語阿難曰汝當知為後世

不孝衆生故從金棺出問訊於母己上佛祖統紀

立願山楊谷寺

桃谷ふあり前編ふ出そとハ画圖遠景ゆへ今又細

水観上人ハ地ふ風樓しのひ山本尊紙威得しふ

書して古ふ著を本尊ハ千手観音立像ふて長六

楊柳水　本堂乃うしろふあり眼疾ふハ水を

得て洗へ忽平癒の霊験あり

鐲鉆水　日所ふ夫婦石　溪川前二町ばかり由来詳ふ路のさた乃

浄土谷　柳谷乃奥十町餘ふあり民家ハ村乃名ハ土人ハ谷と

むかし恵心僧都ハ住しのハ紫紙流しのハ所と

浄土山兼願寺　同所民家乃中ふあり今總堂と号ハ阿弥陀佛

ハて坐像八尺の長と恵心僧都の作

鎮守社　堂乃ひだりふあり神伊勢賀茂八幡稲荷

土人生土神と例ふ

當寺ハ恵心僧都の開基ハて九月九日あり

田畠の字のくさまて釋迦堂観音壇欄杆房等の名あり

石鏘大日如来像　日所ふ岩洞ふ安ハ荒廃して今其紙

安養谷　日所東ふあり

丹屋谷　日所名義詳ふ

行道石　日所ふあり恵心僧都時々ハ来て

行道持念しとはハ紙云ハ

院墓　日村あり乃ふ上ふあり

佛谷　天子陵ハ奥海印寺村の西乃谷ハ佛像の出る岩ハ故ふ名つくハ

ふ所の東西ふ寺院の字あり勝樂寺多門寺住生院等あり

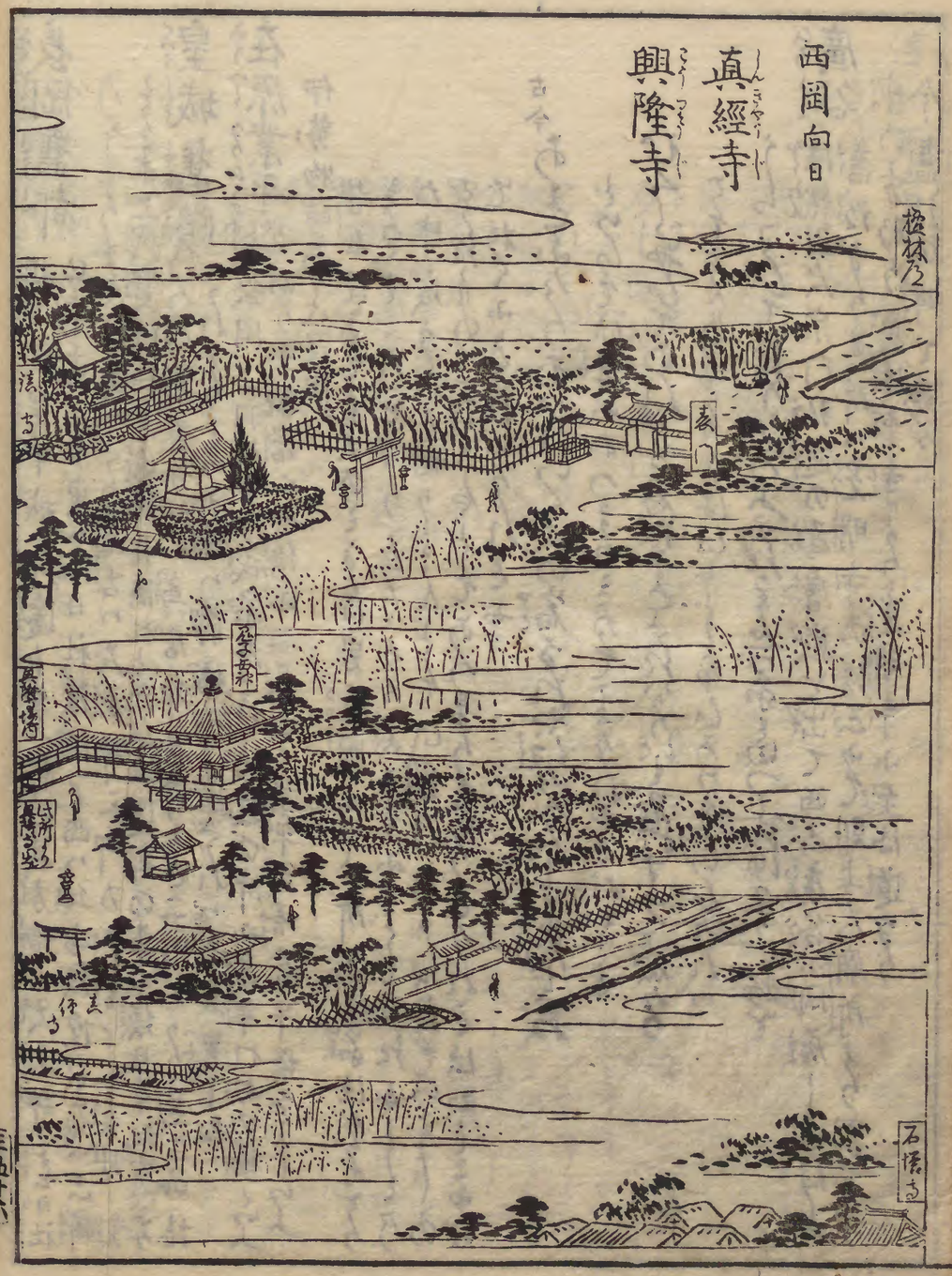
楊谷
立願山
楊谷寺
稲荷
護摩堂
本尊
陸橋

法堂
本堂
護法不動
伊澤

淳和天皇陵西乃岡物集女ふあり土人廟所塚と云ふ松数株あり又
車塚とてあり陵より巽の方一町餘より里所車を埋る所
とて又燈爐前とてあり車塚乃南の谷とて
續日本後紀曰
承和七年五月辛巳後太上天皇皇太子ふ顧命して曰予素花飯を尚に
況や人物故擾耗せんや歛葬乃具一切儉を釋て國人と煩を事
固辭して還しまつれ葬し畢らは纔を釋て國人と煩を事
なかれ藏之人乃觀ぎゝん事を欲せ送葬の辰夜陽を用
ひ追福の事相しく儉約ゝ又國司已心遠ふ紙近ふ有ると
ひとゝしを幽明ふ論そるふ煩ひあらて遂ふ停狀そゝしふ
朝家ふ達をそれ人の子の道ふ教ふ遵て故先ふ背れを行ふく違
失をべうふ動て命して曰予聞人没して精魂天ふ帰をし空
冢墓故存をしを鬼物ふ憑ふ久て長く塚累
故貽に今骨故砕て粉とをしして曰むうしを山中ふ散をゝしを故
中納言藤原朝臣吉野奏して曰予聞人没して精魂天ふ帰をし空
賢明之ふ皇子遺教して骨故散せ山陵ふ葬ふ
去られしを是親王の事ふて帝王乃迹ふ次我國いまゝ陵を
起さはふ用ざるを山陵ふ宗廟の如し宗廟ふ対ふ故ふ
ふ仰ぎ敬せんを古ふ於て又ふ報命して曰予氣力綿惙して論決をる所
半紙に卿等嵯峨聖皇ふ奏聞し裁を蒙まし詔あらて奏未
後太上天皇淳和院ふおゐて崩じ給ふ聖寿又十又さ乃ゆゝ
山城國乙訓郡物集女村ふ葬て奉る所骨を粉ふ砕き大原野
乃西の山嶺乃上ふ散しなを云伝と号をる塚二ツあり其一則
今大原野勝持寺之の西戌の向れ峯ふ經塚と号をる塚二ツあり其一則
天皇の御骨を敬をる所ふて大原の山陵と云ふ三代實録ふ出

長岡舊都 桓武天皇平城より遷しの都と其方境ハ大原野
の東南より東ハ向日社限て西ハ丘陵ふ係て南ハ山麓
乃ごとくまとをしく上古ハ大原野と御ふ長岡と號
をる事三代實録曰大原野長岡村と記ふ又遷都の事ハ續日本紀ふ見
皇城舊蹟 大原野春日社一鳥居卯辰乃方ふ二町ばかり芝生の地
これをとして餘ハ前編ふ見ふ
在原業平趾 長岡上羽村乃氏家乃境地花の中ふ業平れ母の塔と云
ふ五輪塔ふ又傍ふ二基あり業平父塔業平塔なりと云
伊勢物語五十八段曰
昔男ありけり男長岡といふ所に家ありけり
きゝてそこ乃とをりなりふこゝもとなる女ゝも乃
ね中成ゝれを回りゝんとして女ゝ乃
ぞたりの去ハさやとしてあるまりてゝ乃ゝ
てゝ行くふゝれふゝれを女ゝ
古今
あまふゝりあれいくよの宿なれや庭も荒
てゝ草ふ
とゝ云ふて宮ふ入ふまりきゝかそをゝれをこれおゝこ
むかしあれてあれる宿ゝ
そゝうゝ出ゝりゝゝ
うちとけて落かひろゝ
廣谷 法然上人宗門弘通の爲叡山を出て西山廣谷ふ閑居しをる
舊記曰其所ハ光明寺の後ふ則上人廟所より四町ばかり
申の方乃ゝ奥海道寺より光明寺ふ至ハ道なり
今舊記の碑を建る

方丈
堂所
本堂
門
本堂
堂所
向日町


西岡向日
真經寺
興隆寺
表門
石橋

西岡
鶏冠井村
檀林

長岡天満宮 岡田村の西にあり由緒詳かなる事なし 當社神鎮坐のそもそも久代
しなれど弘法大師れ開基し給へる真言の精舎なり厥后世々大師れ境内
住職たり本尊は薬師佛を安置す今乃上羽村の名ある五条業平卿の
亭宅ある其頃は菅亟相いまだ御幼年にはしく業平卿御立館の時は
菅公もあらく伴給ひて此御社に詣まし給へ私に管弦をなし給
しと業平卿段々給ひて後も時々此寺に入興あり雪月の風光に感し
勝景を賞し給へ住僧も御幼年よりの御馴染なれは懇志を運
び浅からず饗應申される時に昌泰四年菅公左宰府に謫遷し給へ
住僧驚き累年の郷信なれば御餘波抑み淀より移屋のかりふ
趣く別懇敬行みて社を志ぼりる菅公其時なれ尊容をうし
住僧に授與し給へそれより二歳を歴て菅神紫に赤御し
給へ聴僧に此地に御社をいとなむの神像を安置し朝夕敬礼し
る星霜累て堂宇も荒廢し給へ御社も衰微し 某師佛の脱士二神の四一躰なり今

神樂殿乃傍に神扉に秘封みして遷宮の時に御領主京極殿より神宮吉
田家に御願ありて執行ひ給へる形今も神威いちぢるくして清人つゝふ
絶間なく書画乃奉納舞曲をひるゞの奉楽ありて社頭乃賑ひ殊
さら近き比境地の風景補益ありて老いのくやる形日ゆげに松乃緑
まさく梅の香一しほ白ひ給へく樹の垣根に神燈乃かゝみ輝き櫻花
の朧々なるに紅の八重咲つゝ多の卯花に押ゞ花の面白いつゞさ
薄あやめ草田舎風に早乙女の笠白く蟬の聲の梢涼しく鳴つまる
夕暮林に空さへ晴まて月の陰清く虫の音うんくと志げく池頭乃
楓樹に時を得て紅葉し蜀錦の風に飄るゝ色かのゝ名る君れ花やゝ
ふ出ゝて青海波を舞給へる如ひ合されあるに初雪れ散ふに
此御神に詣して和歌をなるうしむ一ゝ云佛に行る都て此地に閑
雅みして風趣の真物此に勝まるゝ志れん菅神風流に好ゝ給へ
神意に此に現ゝむ一ゝ今ふかへをあふべし

仁和山三尊寺　岡田村ふあり浄土宗みして本尊い阿弥陀佛立像二尺とり
又観音坂安に立像一尺計
鎮守祠　佛殿乃傍ふあり勧請する所雨寶童子を安に又坂内ふ弘法
大師の作なる人間しき尊像坂ぬむ立像一寸八分當寺坂
三尊寺と号る本堂乃二尊ふ付ふ一躰坂合しふ由縁とり
又山號の名義詳なる次
入定塔　持のうしろふ塚あり傳記なる者なる開祖
入定乃所なりて
神足社　岡田乃南ふあるふ神未考額神足社鑑ふ神社延喜式ふ載るとり又
文徳實録曰齊衡元年冬十月戊辰以山城國神足神列於官社云云
勝龍寺　神足の南隣ふあり又村の名も勝龍寺と号ふ寺真言宗みして
尊い十一面観音乃立像長七寸之開基詳なる次
正氣山成就院　阿弥陀佛いまん像都乃作みして宿院村ふあり浄土宗みして本尊
毘沙門天堪慶の作之不動尊い弘法大師の
作なる開基い教圓法師なりて
白山社　日所ふあり教圓法師鶏鳴水ふ寺の乾ふ町ふあり白山社
賀國より勧請する所之の時偏出を傍ふ小祠あり
成恩寺　山崎ふあり淳ふて神宮寺上と日所ふあり律宗みして本尊阿
山崎尚中興と弥陀佛八幡宮神作開基行教和尚
袖摺松　山崎妙喜庵ふあり千利休ふ茶亭四畳半の圍あり利休時々ふ所ふ
来用居を今単傍ふ植て本尊い十一面観音坂安重作
神降　己ふ離宮八幡宮の後とをつ又人をつめ行教法師ふ
託しをして八幡宮ふ向の所なり

都名所圖會拾遺巻之三終

国立公文書館
National Archives of Japan